

中学生のとき、私には黒人の友達がいた。出会いは中学校入学式、初めて会う同級生らに戸惑っていた私の隣の席に彼女は座っていた。画面外で見る初めての黒い肌に、私は少し緊張した。彼女と初めて話したのは、その日の自己紹介のときであった。彼女はただたどしい日本語で、自分がドミニカ共和国出身であること、そこから日本に引っ越してきたことなど、様々なことを伝えてくれた。私は、そのときのことをよく覚えている。私とコミュニケーションを取るために、勉強中の日本語を話してくれているのが嬉しかったからだ。これを機に、私達は仲良くなった。私にとって、初めての外国籍の友達だった。彼女の母国語はスペイン語だったため、私はスペイン語を勉強した。それは、私がしてもらって嬉しかったことを彼女にもしてあげたかったからだ。彼女に初めてスペイン語で話しかけたとき、私が嬉しかったように、彼女も喜んでくれた。お互い意思が伝わらないこともあったが、それでも彼女との会話は本当に楽しいものだった。友達になるのに、国籍、ましてや肌の色などは一切関係がないということをも身を持って感じ、そして学んだ。

しかし、彼女と仲良くなるうちに、私が気づけていなかった、彼女の周りで起こる様々な問題が見えてくるようになった。彼女の母国ドミニカと日本との文化はもちろん異なる。引っ越してきて間もなかった彼女にとって、日本の文化に慣れることは非常に難しいことであった。しかし、それを理解できなかった一部の同級生は、彼女を否定するような言葉を浴びせていたのだ。「ここは日本なんだから」、「動かれると迷惑だからじっとしてて」、「何が言いたいかわからない」、「どうせあの子にはできない」と、私の耳にもこのような言葉が飛び込んできた。私は、それらの言葉に、なんとも言えない強い憤りを感じた。しかし、勇気のなかった私は何も言い返すことができず、彼女のそばにいたことしかできなかった。彼女も、言葉はわからずとも、その場の空気を感じ取り、申し訳なさそうに立っていた。彼女の悲しげな立ち姿が私の心に重く刺さった。中学三年生に近づくにつれて、彼女に対する理解が広まり、このような発言はほとんどなくなったが、私はこのときの自身の行動を、今でも後悔している。ただ、この後悔が、今の私の人種差別に対する考え、行動の源となっているのは、紛れもない事実である。

母の職場に外国人がいたこともあってか、私を含め家族全員が、外国人への差別や偏見の目を持っていなかった。だから私は、人種差別は別の世界で起きていることのように感じていた。しかし、彼女と過ごす中で、人種差別というものは、いつでも、どこでも、誰にでも起こりうるものだということに気付かされた。今も、どこかの誰かが、人種差別に苦しみ、傷つき、涙を流している。あの後悔から私は、あのときには出せなかった勇気を振り絞って、人種差別のことを SNS で発信し、一人でも多くの被差別民の力になれるよう行動しようと決意した。2019年5月25日に起こった、白人警察が一般黒人を殺害した事件についての投稿は、いつもより多くの人に見てもらえることができた。彼女はその投稿を見て、私に「ありがとう」と伝えてくれた。何だか過去の自分が救われたような気がした。

『文化や肌の色に違いはあれども優劣はない』というのが、私の人種差別問題解決におけるモットーである。私達は皆同じ人間であることを忘れてはならない。差別の種はあなたの思う以上に身近な場所にある。あなたには、私のような後悔はしてほしくない。だから、今、違いを『理解し』、差別の種に『気づき』、そして差別に悩む人の存在を世界に『伝えて』いってほしい。あなたの勇気が、世界を笑顔に変えるのだから。